

矢島 渚男 選

水澄むやフビライハンの骸船

福岡市 高山 国光

【評】蒙古の襲来（文永・弘安の役）が、暴風雨で終わったことは、よく知られる。暴風雨で一夜にして消え去った。四千四百隻の大船団で、それが長崎県北部の湾内で発見されたのである。まさに世紀の奇跡だろう。きつりと静かに戦いの虚しさを訴えているかのようであった。今後の学術調査が待たれる。

【評】「二線に裁ち」の簡潔な美。根の方を切る。農民文化の粋。

大仏の入眼の筆や文化の日

埼玉 酒井 忠正

【評】今年の正倉院展に出品された。「入眼」は仏に魂を入れる儀式。

新米も買へぬ年金暮らしかな

知多市 田上 義則

歴史とは積木崩しか文化の日

熊山ヘドッグフードを投下せよ

仙台市 中村 典子

小春日や砂場につくる富士の山

四日市市 玉置 伸子

渚男選生涯六句天高し

岡山市 宮下 哲朗

若き日の文反古焚くや暮早し

羽村市 竹田 元子

間が持てぬ同士の一夜温め酒

横浜市 瀬古 修治

高野ムツオ 選

鶴渡る声が体をひつぽつて

北本市 萩原 行博

【評】渡りをする鳥は絶えず鳴き交わす。集団の安全確認のためだが、鶴はその声が全体を牽引するようだという。空を滑る一本の鋼線のような鶴一団を彷彿する。

一枚の皿に三枚千枚漬

大津市 竹村 哲男

【評】大ぶりの皿の三枚の千枚漬。模様まで透けて見えそう。「一枚」

「三枚」「千枚」の数字が魔法のようにに美味そうな千枚漬を演出する。

葉を散らし光をこぼし神渡し

狭山市 小俣 友里

【評】出雲に参集する八百万の神々を送る風を神渡しというが、言葉とは不思議なもので落葉も雲間の光もみな神の仕業に思えてくる。

ぴしぴしと葉乾く音冬はじめ

匝瑳市 椎名 貴寿

柴漬の漁夫逝きたり湖広し

鹿嶋市 津田 正義

銀杏散る青空広くなりて散る

香川県 福家 市子

雑炊や母の鼻唄聞きながら

あきる野市 戸田 幸雄

輝の母よく動く夢の中

下妻市 神郡 貢

熱燗や星の飛ぶ夜と思ひつ

神奈川 中島やさか

組板に鱗残れり雪もよい

北上市 佐々木清志

正木ゆう子 選

壁越しに荒山を負ひ牡丹鍋

東京都 望月 清彦

【評】「壁越しに」がいい。壁を隔ていても迫り来る山の殺気。窓越しに見る、とは全く違ふ山の把握であり、自ずと山への畏怖が滲む。そこに生きていた猪の命を戴く。

減塩に負けじと絞る柚子一個

大津市 山下びわこ

【評】酢橘から始まって、カボス、檸檬、柚子。柑橘は確かに減塩の最強の味方だ。勝ち負けではないのに、「負けじ」と強気なのがユーモラス。

妻へ剣く林檎に縦横の切れ目

大阪市 今井 文雄

【評】最も手軽ではあるが、林檎はあんが固くて咀嚼が必要。そこで一切れにさらに縦横に包丁を入れる。見かけは変わらず、良い方法。

枇杷の花コンビニ二通の寡男かな

四街道市 須崎 輝男

暖めむ色どらむとて毛糸編む

藤沢市 並木 紀子

新海苔の封にも残る潮の香

東大阪市 梶田 高清

冬の川鮎六（こ）に二百年

熊谷市 馬場 国夫

姪逝きて本当の空しげれけり

東京都 松永 京子

背番号背負い風やつて来た

東佐野市 赤城 義高

出無精が高じたままでの冬籠

佐野市 村野 則高

小澤 實 選

海鼠なほ組を這ふ腸抜かれ

名古屋 可知 豊親

【評】海鼠腸を食したために海鼠の腸だけを抜き去ったのだが、それでも海鼠はその事実を知らぬげにゆうゆうと這い進んでいる。海鼠の命のありようをみごとに捉えた。

猪去りし跡の残りの藪を掘る

行橋市 野田 文字

【評】猪が収獲前の藪畑に来て、食い散らかして去った。猪の食い残しを掘りあげていることになる。猪の歯牙の跡のない藪は、ほぼ無いか。かまきりの動かざるこそ小半時

那珂市 綿引多美子

【評】小半時とはだいたい三十分ほど。その時間を動かなかったということ、は、獲物になる小さな昆虫が近づくの待っていたということか。

椅子に置くマフラー予約席として

北本市 瀬楽 芳恵

文化の日ラジオトルコ語講座かな

東京都 伊東 茂樹

鷹匠は鷹の砂囊を握みみる

津市 中山 道春

牛膝まみれの犬に寄りつかれ

高砂市 宮田 悦子

水道にぼろ着せるなり冬支度

東松山市 小川 月子

着ぶくれて鉛筆付きのミニ手帳

三原市 天崎 千寿

桜もみちワインレッドと言ふべかり

さいたま市 関根 道豊

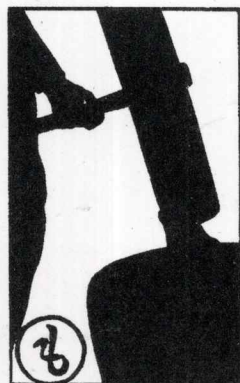
巻物は辞書に

くどうれいん（歌人）

短歌あれこれ

丸田洋渡さんのはじめての歌集が出て、その辞書のような分厚さ（ついに）と思う。持ち上げるよい紙質で大きな割に軽く、光沢のある青い布張りの表紙は触っただけで何かご利益がありそう。四つ下の彼が愛媛の高校生の時から交流があったので、数年前盛岡に越してきたときはうれしかった。

歌集を作りたいのだが、いま手元にある短歌はざっと数えただけでも四千首あるため悩む、と聞いたときは腰を抜かした。太い巻物にするしかないんじゃないのと冗談を言ったが、辞書になるとは。分厚さの理由は一首一ページという贅沢なつくり。しかも章立てなし。豊かな余白の中で淡々と一首に向き合い続けると、平日の美術館でじっくりと作品を眺めるような心地になる。集中を切らさず一息で読んでしまう庄巻の五百首だ。照りだした昼にあなたは傘をさす光はそんな傘つらくも丸田洋渡『これからの友情』



題字デザイン・イラスト 福田美蘭